



金村龍那先生

衆議院議員、日本維新の会国会対策委員長。

愛知県出身、昭和54年生。平成14年から衆議院議員秘書を10年間務める。その後、児童福祉施設を8ヵ所立ち上げ、運営会社の社長を務める。

その過程で政治を志し、令和3年の衆院選で初当選。厚労委員、政倫審委員を勤める。

【座右の銘】

向き 不向きより 前向き

只今ご紹介いただきました日本維新の会衆議院議員の金村龍那でございます。本日は党からメッセージを代読する役割を頂きましたので、まずメッセージを紹介させていただいた上で、私からご挨拶をいくつかさせていただきます。

「本日は新しい憲法をつくる国民大会に多くの方々にご参加をいただいたことにまず心から厚く御礼を申し上げます。またこの場を設けていただいた自主憲法制定国民会議の皆様、新しい憲法を作り、そしてこの国を良くするという献身的なご活動に、心から感謝と敬意を表します。

日本国憲法施行から75年を経てこの間、現行憲法が、時代や国際情勢の変化に対応できなくなっていることが、課題が露わとなってきました。折しも出口が見えない新型コロナウイルス、そしてロシアによるウクライナ侵略も加わり、時世から取り残された現行憲法のままでは、国民の生命財産と我が国の平和、これを、守ることができな

いのは明白であり、遅滞なく改正論議を進めるべきだと考えます。日本維新の会は教育の無償化、統治機構改革、さらには憲法裁判所の設置、この3項目について改正条文を示しています。

いずれも日本の未来の為に不可欠な改正であると確信をしています。合わせて私たちは緊急事態条項の創設、9条改正に対しても真っ正面から取り組み、作業を進めているところです。

そもそも国民主権をかける日本国憲法が、一度も国民投票で審判を仰いでいないのは大いなる矛盾です。国民が主権を行使する国民投票を実施し、憲法を国民の手に取り戻してしかるべきです。現行憲法に一切手を触れさせないことに固執し、国会での憲法論議を阻むことは国民の権利を奪うことになり、民主主義の後退に繋がります。各種世論調査を見ても国会での改憲論議を求める声が過半数を超えています。憲法改正を望まれている国民の皆様の熱い想いは私たちにとっても大きな

力となります。憲法改正なくして日本の明日はありません。

日本維新の会が国会における憲法論議の先頭に立ち、1日も早く憲法改正の国民投票が実施されるよう、全力を尽くしていくことをお誓い致します。」

以上、党からのメッセージを読み上げさせていただきました。

この2カ年にわたる新型コロナウイルス禍、そしてロシアによるウクライナの侵略によって緊急事態条項に対して国民の関心が非常に高まっております。それだけに我々日本国民一人ひとりが安心・安全・平和とはどのように守っていくべきなのか、どうやったら我々自身が自由で公正な社会を作れるのか、そのためには憲法改正が必要なことは、自明の理だと思えます。

私はこの2年半、川崎で政治活動を日々行なってきましたが、このコロナ禍と今回のロシアの侵略が起こる前には、我々が政治活動しておりますと自民党に協力して憲法改正に賛成しているから、日本維新の会は応援しない、というような言葉を聞くことができました。

ですが、私は、憲法改正したいから、憲法の改正の必要性を感じているからこそ、自民党ではなく、日本維新の会として真正面から議論していきたい。そのような経過から「維新の会」という党を選択したわけです。しかし、その「改憲なら維新の会に入れたい」と言っていた人と毎回議論していたんです。ですが、この数か月、彼も憲法改正に反対しなくなりました。国民にとって、やはり、コロナ禍と、今回のロシアのウクライナ侵略

によって、考え方が変わって来たと思われま

こうして、国民の皆様のお考えが変わり始めたのを体感いたしました。私も今回の機を逃せば、また5年10年と憲法改正の機運が遠のいてしまう。だからこそ、私は立法府の一人として、しっかりと憲法改正の推進に、全力を挙げようと決意しております。

我々日本維新の会は、昨年の衆議院選挙を経て党内に憲法改正調査会を立ち上げ、オープンな議論として一週間に1回、そしてインナーチームとしては週に2回、顔を突き合わせて、まさにこの改正議論を集約している最中です。本今朝、今日も松井一郎代表から発言があり、三年に一度の参議院選挙、四年に一度は行われる、衆議院選挙のように、ともかく大型選挙のたびに、憲法改正の国民投票を実施する。それを制度化するように持っていきたい、との話がありました。

わが党は、党内の議論で、そのようにしております。つまり、私自身は立法府の議員として、憲法改正を少しでも前に進めていく。そして必ず憲法改正を実現して、日本の平和、国民一人ひとり安心安全を感じながら、人生を送れるよう、しっかりと頑張ることをお誓い申し上げ、私のご挨拶とさせていただきます。

共に頑張りましょう。

(拍手)